Seven prince of the thousand years Labyrinth

BEFORE DAWN

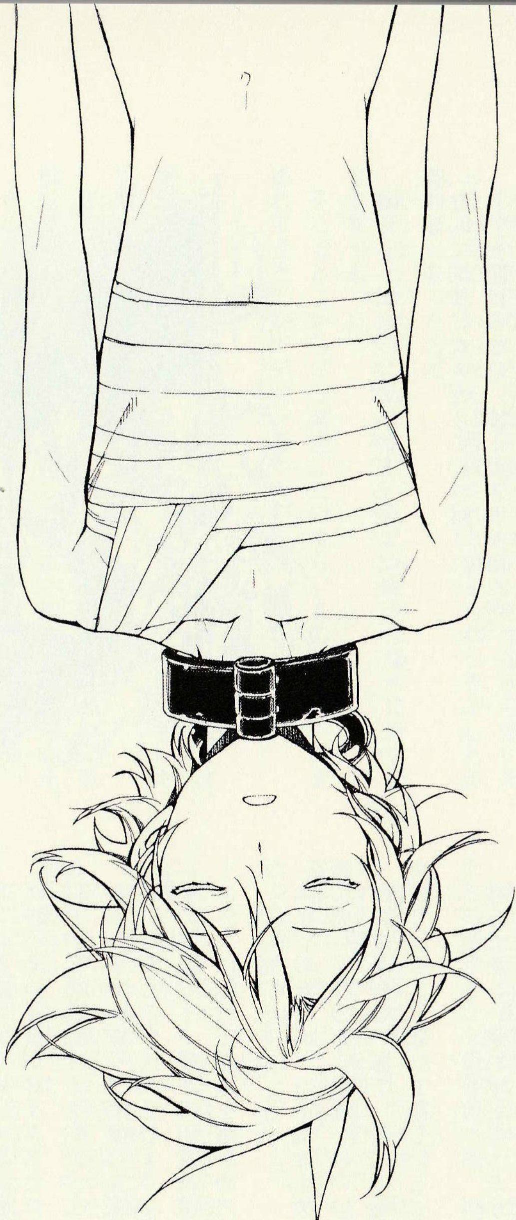
千年迷宮の七王子

BEFORE DAWN

BEFORE DAWN P.5

16th P.50

挿絵：花鶏ハルノ
SS：相川有
（ハル有）



BEFORE DAWN

BEFORE DAWN登場人物紹介

千年迷宮城に集められた
皇帝候補者のユアンたちは
やっとのことで
迷宮を脱出する。
しかし一行は
同時に進行していた
皇帝の暗殺計画への関与を
疑われ、皇城の騎士団に
拘束されるのだった。

ユアン・ジュノー

本編の主人公。
皇帝候補者として選ばれたものの、滅びた帝国の末裔だと明らかになり皇帝暗殺計画の陰謀に巻き込まれる。
皇城の「永久牢」に落とされそうになったところを仲間たちに救われる。

ザン・オーデュポン

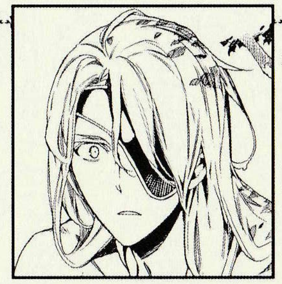
帝国の誇る盲目のカリスマ大歌手。
ユアンと出会い、恵まれない過去も隠すことなく信頼し合う大切さを確認する。
優しく穏やかな性格。

ロレンス・アクロイド

騎士見習いで帝国一の剣士。暗殺された皇帝の隠された息子。
千年迷宮城でユアンと出会い、唯一無二の友として忠誠と守護を誓う。
生真面目な性格。

ギデオン・レッドフィールド

正義感に燃える青年運動家で皇帝候補の筆頭と言われていた。
既得権益が支配する帝国のシステムに対しては反対する立場をとっている。
古い帝国の血を受け継ぐユアンを一度は殺そうとした。
熱血で時々緩い最年長。



タイタス・ラム

路上出身の盗賊。
身寄りのない子供たちを率いて大盗賊団の首領をしていたが、探偵メサイアによって投獄される。弱き者も救える「真の皇帝」を目指していた。
明るく自由放埒な性格。

オーガスト・モーガン

豪商モーガン家の跡継ぎ。
常に女装している。
皇帝や七侯の地位には興味が持てず、家業を継ぐつもりでいた。
面倒見がよく、はっきりものをいう性格。ロレンスとは幼なじみの間柄。

メサイア・リード

帝国で有名な名探偵。
その正体は過激派血統復古党の工作員で、数学と言語学の天才アマデウスである。
古い帝国の末裔であるユアンを「真の皇帝」と認め忠誠を誓う。冷静にみえて負けず嫌いな性格。

血統復古派(サングイニスト)

現在の帝国に希望が持てず、古い帝国の血を引く「真の皇帝」の復活を望む人々。
一部が過激化し、「血統復古党」としてテロ活動の中心的存在となっている。今回の皇帝暗殺計画の首謀団体である。

帝国と七領

七国と皇帝領からなる帝国。一代限りの主君が支配しており、それぞれ民衆からの人気が高い候補者を選んでその中から皇帝を選ぶ。しかし内情は皇帝や七侯ではなく、世襲の貴族たちが握っている。皇帝領と接しているソレム領の首都が帝国の中心地となっている。

◆ザン・オーデュポンが知らないこと

「なんて間抜けなんだ！こいつは！」
ドアを開けるなり、オーガストが叫んだ。
相変わらず持ち前の口の悪さを隠そうともしていない。
いつもならすかさず窘めるところなのだが、ザンはそうしなかった。
言葉は乱暴でも、その声色からユアンを心配する気持ちが充分に感じとれたからだった。
「ともかくはやく中へ！」
ブーツの靴底がふた組、ごつごつと古い床板を鳴らし家の中へ入ってくる。
ザンは盲目だがそのぶん音に敏感だ。
だからその足音がタイタスとロレンスのものだということはだれに確認せずともわかっていた。
ロレンスはユアンを抱えているのだろう、しっかりとはしているがどこか沈み込むような足音だ。
「奥の部屋です。寝床の用意は済ませてありますよ」
ユアンに触れて無事を確かめたいとはやる気持ちをおさえ、ザンは二人を促した。
ユアンのためのベッドはオーガストとギデオンが協力し、庭に面して窓のある風通しのいい部屋に用意しておいた。
ザン自身がこの家で一番居心地がいいと感じた場所だったので、そこに置いて欲しいと二人に願い出たのだ。
彼らの新しい隠れ家となった小さな民家は、皇城に隣接するソレム領の郊外にあった。
千年迷宮城から無事に脱出したあと、皇帝の実子であるロレンス、生死をはぐらかしてうまく隠れおおせた探偵のメサイア、それにさっさと馬車から逃げ出した盗賊のタイ

タス以外は全員が牢へと送られることとなった。
皇帝暗殺に直接は関わっていないと判断されたせいか、ユアン以外の者は解放され、そのままオーガストのものであるソレム市街の私邸に幽閉されたのだったが。
メサイアの立てた作戦の通りにユアンを牢獄から救い出した時点で、いったんは解放された彼らもれっきとしたお尋ね者となったのだ。
連れ出したユアンとともに、どこか安全な場所に身を隠す必要があった。
そこでどこからどう調達したのやら、この民家に一同を連れてきたのがギデオンだった。

ここに来る前に彼らが過ごしていたオーガストの私邸は、豪華でありながらもプライベートを感じさせる落ち着いた空間だった。
そこではザンもギデオンも客人として丁寧に扱われ、肌触りのいい部屋着と市街地にしては広い個室を与えられた。
そのさりげない気遣いや触れるものすべてに、モーガン家の財の豊かさをあらためて思い知らされたものだ。
だがここはなにもかもが違っていた。
全てが素朴で、気取るところのない、どこか懐かしい空間だった。
少し軋むドアやテーブルの縁に触れると、長年人の手で扱われてきた優しい丸みが伝わってくる。
ギデオン曰く、元は農家だったらしく、周辺一帯がどこぞの大貴族の荘園の一部ということだった。
あたりには果樹園が広がり、その間にぽつぽつと小作人たちの家や小さな農作業小屋、納屋などが点在しているという。
首都の近隣地域にしてはのどかな場所だった。
今は夜だから窓を閉め切っているが、それでも爽やかな草の匂いや、どこか近くで咲いているのだろうか、スズランの香りが漂ってきている。

ここにいると、ザンは行方不明になった母親のことをよく思い出した。
紅い花の中毒者だった彼女に関してはいい思い出がないが、それでも母が正気を保っている間はザンに優しく振る舞うことがあった。
ここにいるとなぜかそのひとときの暖かい空気が、ふと蘇る気がする。
ユアンもきっとこの家でなら、ゆっくりと療養することができるだろう。

用意された寝床の前でなぜかしばらくためらった後、ロレンスが静かにユアンを降ろした。

「ちょっと寝てくる、あとはよろしくな」

と盛大に欠伸を漏らしながらタイタスがそのままロレンスを引きずって出て行く。

ロレンスがなかば抵抗しながらもなすがままにされているのは、今はユアンを護るためにも睡眠が必要だと感じたからだろう。

タイタスも含め、いざとなったときに自分たちが使いものにならなかったら、元も子もないことを承知しているのだ。

オーガストが外の井戸からきれいな水を汲んで戻ってきたので、二人でユアンの体を拭いてやることにした。

最中にオーガストがつらそうに呻いたり、ため息をつくので、彼の体のそこかしこに痣や傷があるのだろうと想像が付く。

清潔で柔らかい部屋着に包まれ、寝息を立てているユアンの顔に触れながら、ザンは胸が締め付けられる思いがした。

（この子を失わないで済んだ…）

湖に沈みゆく迷宮城から脱出したのは、つい昨日のことだ。

そのあとユアンと離れてからは一日と経っていない。

それでもずいぶんと長く離れていたような気がした。

（息の詰まるようなこんな想いこそ、本当に大切な人ができたという証なのかもしれない…）

ザンは考えた。

そういえば迷宮城の中で初めて出会ったとき、ユアンのことをどこか懐かしいと感じたことをザンは思い出した。

本来ならそれはいつもザン自身が恋に落ちるときの予感なのだが…。

（恋?そうではなく、もっと根の深いなにかのような気がするのだけれど…）

ザンは他の男たちのように「目」で恋をしないから、もともと「好き」という感情の境界には曖昧な部分がある。

老いていようが若くあろうが、男だろうが女であろうが、ようは相手を腕に抱いて熱くなりたいかどうかなのだ。

ただユアンに対する感情は、そんな一時期の熱情に任せて欲するようなものではなかった。

（こんな想いは知らない…なぜかひどく重くて、いつもハラハラする）

家族の愛情を知らず、これまで垣根のない生き方をしてきたザンには、その感情がなにを意味するのかはわからない。

ただ彼が、自らにとってなくてはならない存在だというだけだった。
少年の冷えた額を撫でながら、ザンはいつまでもその静かな寝息を聞いていた。

◆ギデオン・レッドフィールドが知らないこと

明け方―
医者を連れて隠れ家へ戻ったギデオンは、皆が『そうするだろうな』と思ったとおりの行動に出た。
つまりユアンの帰還をおおいに喜んだあと、その寝顔を見るなり血相を変えて驚いたのだ。
「どうしてこんなことに！」
嘆くというより、ギデオンはほとんど怒っていた。やりどころのない硬い拳を狭い部屋の中で振り回し、いちいち避けなければならなかったオーガストを閉口させた。
ユアンの弱り具合は、それほど目に見えて酷かったのだ。
もともと迷宮城の脱出で体力を使い果たしていたところに、休む間もなく牢獄で厳しい尋問を受けたのである。そう長い時間ではなかったが、牢獄の中では食事も水もろくに与えられず、ユアンの体は壁に貼り付けられるように繋がれていた。
枷を首にも付けられていたために、うっかりうたた寝でもしようものなら、あっという間に喉が締まってしまう、そんな苦しい状況に置かれていたのだ。
体力の限界を迎え、幾度となく膝を折りそうになりながらも、ユアンは気を失うことすら許されていなかった。
ほとんど気力だけで立っていたのだろう、永久牢から救い上げたロレンスに支えられたとたん、力を失ってその腕の中に崩れ落ちたという。

ユアンの手足や首には枷の跡が痣となって残っていた。一部は皮膚が破れているところもあって、見ているのがつらいほどだった。
その他にも打ち身や擦り傷が全身にあり、加えて監獄へ入る前にもユアンは胸に大きな怪我をしていた。
幸い見える傷跡の範囲が大きいだけで、あまり深い怪我ではなかったようだが、ろくに手当もされていないようでまた傷が少し開いていた
医者の手でそれらの惨い跡が露わになると、ギデオンは胃を掴まれるような感覚に襲われた。
その感覚の正体はたぶん『恐れと怒り』だ。

様子を見終わり、傷の処置を丁寧に終えると、年老いた医者はいくつか薬を置いて去って行った。
「ロレンスは別の部屋で休んでいるのか。正解だったな、あの傷の様子を見せなくて」
ダイニングから持ち込んだ飲み物を手に、ユアンの周りにめいめい腰を下ろし、三人はようやくひと息ついた。
「ロレンスは見てはいなくてもユアンの全身に傷があることには気付いていたでしょう。かなり慎重に扱っていましたから」
見えないザンがどうしてそこまで他者に敏感なのかはわからないが、とりあえず彼が間違うことはほとんどない。
そうか、といいながらギデオンはこの村の素朴で濁りのあるワインを口にした。
懐かしい、深みのある香りに包まれ、彼はようやく胸の怒りを解きつつあった。
ザンもオーガストもそしてギデオン自身も、みな疲れてはいるが、やっとユアンを取り戻したことで幾分空気は和らいでいる。
それでも騎士団やソレム軍に見つかれば全員が監獄に逆戻りなのは確実で、気を緩めるにはまだ早いのだったが…
「あの医者はどっから連れてきたんだよ？大丈夫なのか？」
オーガストが男性にしては小さく整った唇を尖らせながら、医者の出て行った扉のほうを見やった。
こんな時にも可憐な女装のままだが、ギデオンにとってはそれがありがたい。
「貴方の知り合いなのですか？」
首を傾けたザンは、寝不足で多少やつれてはいても相変わらず美しいままだ。
「男とわかっていても綺麗な者に囲まれていると癒やされ

るよ…」

二人を目の前に、ユアンの酷い状態を見ていてささくれた気持ちが溶けていくのに感謝をこめて呟いたら、ソファの横に座ったオーガストのヒールが脛にめり込んだ。

「おっさんが癒やされるか癒やされないかはどうでもいいんだよ！それよりあの医者、僕たちがここにいることをソレム軍にちくったりしないだろうな？」

「オーガスト…ギデオンにも癒やされる資格ぐらいあるのですよ」

とザンが微妙に凹む言い回しでオーガストを窘める。

「資格ってなんなんだ資格って…まあいいか。大丈夫だオーガスト。あのご老人はそういうことはしない。彼はこの村の医者で、俺の古くからの知り合いだ」

そう言うと、またザンが首を傾げた。

「もしかしてここは貴方に由縁の有る村なのですか？」

相変わらずザンは鋭い。

「…ここは俺の育った家なんだよ」

そういうと二人はえっと小さく声を上げた。

「といっても寄宿学校に入る年齢になって以降は、たまの休みに戻ってくるだけだったんだが…」

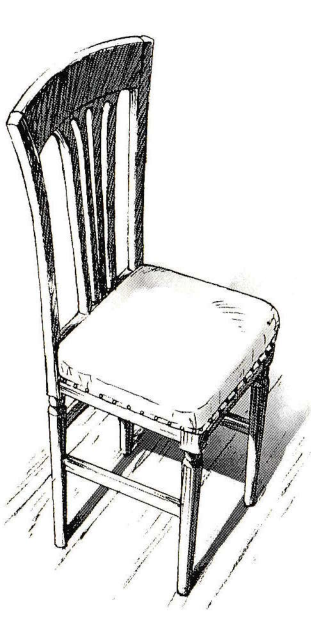
二人が何か訊きたそうにしながらも黙って待っているのに気付いて、ギデオンは苦笑しながら続けた。

「母親の生家だったんだ。もうそっちの人間はだれも残ってないんだけどな」

部屋を見渡しながら、ギデオンは少年の頃を思い出していた。

ユアンのベッドのある辺りに昔は母のお気に入りの椅子があって、ギデオンは遊んで外から戻ってくるといつもその足元に直行した。

そして繕い物をする母を見上げながら、その日あったことを包み隠さず話すのだ。



そんな彼も寄宿学校へ入る年頃になると、思春期の少年らしく徐々に母親に話せないことも増えていったものだった。

そうして彼が青年になりつつあったとある冬のことだった。

学校で規則違反を咎められ、罰を受けたせいでいつもより休暇に戻るのが遅くなったことがあった。

その頃彼の母親は常に病気がちで、伝え聞く症状の悪さが気になっていたギデオンは、学校から解放されると、村へ飛んで帰ったのだったが…。

彼を見る村人たちの顔が何故かみな一様に沈みきっており、訝しんで家へ駆け込んでいった時にはもう、母は病床から帰らぬ人となっていた。

「だからな、これは俺自身の我が儘にすぎないんだが、俺はここでだれかに元気になって欲しかったんだよ、たぶん」

ギデオンは目を細め、ベッドの上のユアンを見やった。

「たとえば、自分が命を奪ってしまうところだったこの子にな…」

「ギデオン…」

つらそうに呟くオーガストがあまりにも可愛らしく見えて、ギデオンは彼の頭をくしゃくしゃに掻き回しそうになるのをすんでのところで堪えた。

年下には間違いないが、すでに成人している彼は子供扱いされるのをなによりも嫌う。

そんなふうに悶絶していたら、そっと近付いてきたザンの手が肩に乗せられるのを感じ、ギデオンは思わず微笑んだ。

ザンは友人だが、命の恩人でもある。

湖を泳いで生き延びろと背中を押してくれたのも彼だったし、水底に沈みそうになった自分を力強く引き上げてくれたのも彼の手だった。

そのせいか、ザンの暖かい手の平を感じるだけでどこかギデオンは救われる思いになるのだ。

思えば、皇帝候補として集められた自分たちが、こんなに短い間にこれほどお互いをわかり合い、めったに他人に話すことのない生い立ちまで告白していることがギデオンには不思議だった。

もしかすると、これが一生の出会いというものかもしれなかった。

しかしユアンに関しては、実をいえばまだ自分の気持ちに整理のつかない部分がある。

ギデオン自身は一度は彼を殺そうとした。

迷宮の中で、彼がイグニス帝国の末裔であることを知り、ユアンの存在そのものが国に混乱を招くと信じたから

だった。

そしてそれはその通りになった。

ユアンは迷宮城を出るなり、皇帝暗殺を企んだ過激派血統復古党(サングイニスト)との関係が疑われ拘束(こうそく)された。

もちろんそんな証拠などどこにもないのだが、「国に混乱をもたらす」という、ギデオンがまさに危惧(きぐ)した理由で処刑される寸前だったのだ。

これから自分たちは彼の身の潔白を証明せねばならず、そのために昨夜からみんなであちこち走り回っていたのだが……

不思議なのは、そんな自分があのとき間違いなくユアンを殺せただろうという事実だった。

彼が死んだら、その亡骸(なきがら)を抱いたまま、沈みゆく城と運命をともにしようとまで考えていたのだ。

実際ユアンが傷付けられて炙(あぶ)り出されたのは「自分と死ぬならいいが、他の人に殺されることは許さない」という自分勝手な想いだった。

裏を返せばその時にはもうすでに彼自身、それほどにユアンに心を許し、奪われていたということである。

（いったいいつから、そこまでユアンを身近に感じていたのか……まるで我が一部のように）

それがギデオンの苦悶(くもん)のひとつだった。

いくら考えても答えは出ない。

ユアンのいいところなら、おそらくたくさん並べられるが、そういうことではないだろう。

男、それも年若い少年相手に惚(ほ)れたなどと簡単に言いたくはないが、人柄に心惹(ひ)かれるときに理由などないのかもしれない。

ザンにしても、初めて城の中で出会った瞬間にはもう、長年の親友のように感じていたのだ。

ギデオンは『運命』を信じるほうなので、最終的にはそのあたりに自分の気持ちを落ち着けるだろうとわかってはいた。

「ギデオン」

いつのまにかオーガストがうたた寝を始めたのを知っていてか、ザンの声はほとんど囁(ささや)くようだった。

「不思議です。私はここへ来てから、母のことをよく思い出すようになっていたのです」

ユアンとオーガスト、それにおそらく少年時代の自分の部屋で眠っているロレンス、タイタス。

大切な者たちの安らかな寝息が、大切だった場所に満ちていくのをギデオンは感じていた。

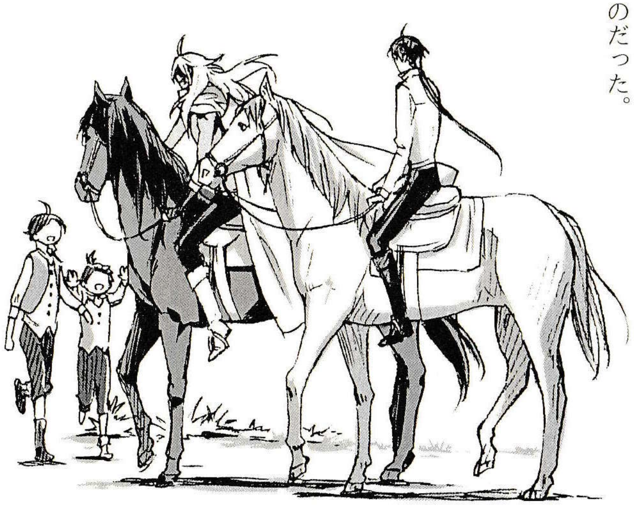
「たぶん……それは、ここが貴方の母親の思い出の詰まった

家だから、だったんですね」

ザンが微笑んだ。

そうして大切な者を失ったこの家で、大切な者が命を取り戻すなら。

この出会いは、まさにギデオンにとって二度と手放せない運命なのだった。



◆ロレンス・アクロイドが知らないこと

首の後ろに湿った温かい息を感じて、ロレンスは思わずハッとした。

馬の世話をするために起き出したのはいいが、井戸から汲んだ水を眺めていたら、知らない間に時が過ぎていたらしい。

早く喉を潤したくてしびれを切らした馬が、背後から彼を急かしたのだった。

ひやりとした朝靄が、古い農家に隣接した厩まで入り込んできている。

厩といっても農耕馬用の小屋ではなく、乗馬用にしつらえた造りで、人が住んでいた頃には四、五頭がここで飼われていたのだろう。

世話をするための道具は全て揃っていたし、村のだれかが用意してくれたらしい、新しい飼い葉が乾いた一角に積まれていた。

昨日、混乱に乗じて皇城から連れ出した栗毛の馬は、初

めてロレンスを乗せたわりには実によく働いてくれた。

叫ぶ人々でごった返す城の中庭をうまくすり抜け、門の手前から全力疾走させた時にも見事に騎士団を振り切ってみせたのだ。

城の厩からその馬を引き出して来たのはタイタスだったが、あの盗賊にはやはりそれなりにお宝を嗅ぎ分ける能力が備わっているらしい。

ただし、彼自身が好んでまたがった見栄えのいい黒い牝馬は、この村に着くころには先にヘタっていた。

「お前はよく走ったな」

褒めてやりながら、ロレンスは手入れの行き届いた滑らかな毛並を撫でてやった。

市街地では無茶をして石畳の上をさんざん走らせたうえに、牢からの長い道のりはユアンを加えた二人分の体重にもずっと耐えてくれたのだった。

—ここまでの道すがら…

隣に繋がれていたタイタスの馬にも水を与えてやりながら、ロレンスはまた考え込んだ。

あの時、疾走する馬の上でユアンの体が跳ね上がるのを懸命に抑えながら、ロレンスは手綱を取っていた。

その重みが宙に浮くたび言い様のない焦燥が胸を襲い、しかし力を込めすぎると彼の傷付いた体をさらに痛めつけてしまうのではないかと、強く引き寄せることすらためらった。

ようするにずっと緊張し通しだったのだ。

彼をあの死の牢獄から取り戻した後も。

実際ユアンの安全が確保された状態なら、自分はいつも安心できるのだろうとロレンスは考えていた。

少なくとも迷宮の中ではそうだった。

ユアンを生きて外に出すことばかりを考えていたから、気がつかなかったのかもしれない。

それが間違っていると知ったのは、ここへ来て彼の体を柔らかいシーツの上に降ろそうとした、その瞬間だった。

腕の中にあった重みや暖かさ、息づかいが離れていくのを感じたときに、ふと体中がこわばり動かなくなった。

—離したくない

我が腕は彼を離したくないのだ、それを自覚したときにロレンスは動揺した。

自身から無理矢理もぎ離すようにしてベッドに降ろしたあとは、少し茫然となった。

ユアンと離れるだけで、自分の中に不安が生まれるというのか。

だれかのために生きることが、自身に強さを与えてくれると信じていたのに。

そのことが、今朝もロレンスを悩ませている。

といきなり後頭部をだれかにはたかれ、ロレンスはまた我に返った。

後ろを振り向くと呆れたような顔をして、タイタスが立っている。

「そんなふうにお前が頭で塞いでたら、馬が水飲めねーじゃんかよ」

また自分は桶の中を覗きこむようにして考え事をしていたようだ。

慌てて立ち上がり、桶から退くと、黒毛の馬が待ってましたとばかりに水の中に鼻を突っ込んだ。

「それよりこの村のはずれにさ、馬が喜ぶような綺麗な水場があるらしいんだが」

欠伸をしながらタイタスが言う。

髪はぐしゃぐしゃだし半裸のままマントを肩に引っかけて、きちんとしているとはとても言いがたかったが、それでも隣で寝ているときよりまだましだった。

シーツに飛び込む前に眼前で容赦なく全裸になるタイタスを見て、疲れていたロレンスはなにかものを言う気力すら失ったのだった。

「水ならここのも充分綺麗だぞ」

「そうじゃねーんだよ、ちとそこまで散歩したいって俺さまは言ってるんだよ」

「行けばいい」

「じゃあ行こうか堅物野郎」

なぜそうなる…と思いながらも、ロレンスは馬を引き出した。

少し歩かせて、村の中で蹄鉄を見てもらえる場所がないか探すのもいいかと考えたのだ。

それに周辺を一度見回っておきたかった。

ユアンの側に居ることではなく、彼を護るのが本当は自分の仕事だと自身に言い聞かせ、ロレンスは隠れ家を離れた。

勾配のある道を馬に揺られて登っていくと、太陽が高くなるにつれ朝靄が引いていった。

道の両脇にいくつか農家が並んでおり、低い石垣が延々と続く。

道沿いの家畜小屋から鶏や牛の鳴き声が聞こえ、朝一番の仕事に追われる村人たちの姿もそこかしこに見受けられた。

普段は旅人の姿すら物珍しいのだろう、人々は二人を驚いたように見たが、そこに警戒の色はなかった。
「ギデオンが言った通りだな。この村の奴は俺たちの敵ではないらしい」
「いい村だな」
女に手を振ってニヤニヤしながらタイタスが言う。
目を丸くして走り寄ってきた子供に小遣い銭を投げてやったり、そこらのおやじに声をかけてみたりと、とにかく騒がしい男だ。
「これでソレム軍に見つからなきゃ、ユアンも安心してここで養生できるってもんだろ」
村人に教わったとおり、果樹園の脇にある山道に入ると、ほどなくして沢の音が聞こえてきた。
木々の間から光を受けて流れる小川が見え、道はその流れに沿って続いているようだ。
「見ろよ！鹿だぞ！それも親子連れだ！」
見るものにいちいち反応しているところを見ると、タイタスはこのような田園風景に馴染みがないらしい。
実家に戻れば人の立ち入らない深い森や、狼の出るような山々に狩りに行くことも珍しくないロレンスにとってここは自然豊かと言うよりは、どちらかといえば暖かみのある人里と呼べる範囲だ。

沢沿いに馬を歩かせしばらく行くと、大きな水音が聞こえてきた。
滝だ。
瀑布自体はそう高くはないが、横幅はこの村の大きめの一軒家ほどはある。
テーブルのようなゆったりした段差から途切れなく水が落ちて、辺りに天然のプールを作っている。
タイタスが歓声をあげ、馬から飛び降りるなり、器用に服を投げながら滝壺に突っ込んでいくのが見えた。
（あいつ、泳ぎたかったのか…）
二頭を水場に近い木に繋いでやると馬たちも嬉しそうに水や草の匂いを嗅いでいる。
少し迷った後、体を洗うのにもちょうどいいかとロレンスも服を脱いだ。
ブーツの形になれきった足に冷たい水が馴染んでくると、思いきって水へと飛び込む。
「生きてて良かったぜ、ほんと。一人残らずな」
いきなり水面へ顔を出したタイタスが、青空を眩しそうに見る。
あの迷宮城で死んだものもいるのだが、タイタスの感激に水を差すのも悪い気がして、ロレンスはあえて黙っていた。

とくにオセロに関してはどうなったのか、メサイアから聞いていないので、生きているのか死んでいるのかもわからない。
「しかしそこらじゅうひりひりするなー」
「小競り合いもずいぶんあったからな。お互いこんな擦り傷で済んでいるのが不思議なぐらいだ」
皇城から抜け出す時はともかく、ユアンを救いに牢へ侵入した時にはかなりやりあった場面も多かった。
タイタスに背中を預けて闘っている最中になんの憂いもなく集中できたのは、あの迷宮のなかである程度お互いを把握していたからだろう。
それに彼自身信じられないことに、ロレンスはこの盗賊をいつのまにかすっかり信頼しているのだった。
「それにしてもお前、ユアンを救い出せたにしちゃ浮かない顔してるよな」
浮かない顔、やはりそう見えるのだろうか。
「ユアンの奴、もしかして相当悪いのか？」
タイタスの顔が曇ったので、ロレンスはそうじゃないと首を振った。
「このまま安静にしていればちゃんと回復するそうだ」
雫を落としながら水から上がると、馬が彼に甘えるようにすり寄ってきたので顎の下を撫でてやる。

すっかり全身が冷えたせいで、ロレンスは馬の毛並みをいつもより温かく感じた。
服を身に付けながら、
「俺はもしかして弱くなったのだろうかと思ってな」
というと
「はあ？お前が？」
と素っ頓狂な声が返ってくる。
振り返ると滝の薄いカーテンに打たれながら、タイタスがこちらを見ていた。
また呆れかえるような表情だ。
「昨日ユアンを手放すとき不安に襲われた」
というとタイタスは盛大に吹いたあと、水を飲んだのかむせだした。
「大丈夫か」
「いやいやいや…」
若干辛そうな顔で手を振ってみせる。
「俺さま昔、怖い令嬢にとっ捕まって、変なもん飲まされたことがあって」
なんの話だろうかとロレンスが首を傾げると、タイタスは話を続けた。
「気がついたらそのお嬢さまの部屋に監禁されてたんだよな。こう手枷までつけられて」

思い出したのか、タイタスは嫌そうな顔になった。

どこまでも奔放なこの男のことだ、そんなふうに縛り付けられるのはさぞ苦痛だっただろうとロレンスは少し同情した。

しかし自分とそう年も変わらないのに女性との修羅場はずいぶんと経験豊富なようだ。

「その時に言われたんだよ、『アナタが目の前から居なくなるのが怖い』って。だから俺を縛り付けようとしたんだ。まあ手下に救い出して貰ったから良かったようなものの、もしあのまま俺さまあそこで飼われていたら…」

おぞましい想像に至ったらしく、タイタスがぶるっと身を震わせた。

「お前にとって、ユアンってそういう対象なのか？手放したくなくて縛り付けたい…」

考える必要も無く、ロレンスは否定した。

ユアンを縛っておきたいなどと決してそんなふうには思わない。

彼にはいつも光溢れる場所でのびのびと笑っていて欲しい。

それが心底ロレンスの願うことだった。

「だったら別にかまわねえだろ。だってそういうもんだろ、気の合う奴といると楽しいし、ずっといたらもっと楽しい」

それで自分が弱くなったとしても、そんなことは重要じゃねえよ、とタイタスは言い放った。

そうか、こうやってこの男は盗賊のリーダーとして子供たちの王になったのだ。

ロレンスはふいに腑に落ちた。

大切なものをたくさん抱えながら、それが弱みになりメサイアに隙を突かれもした。

しかしその『大切な者のために弱くてかまわない』という魂の強さがあってこそ、民衆からの人気を得て、賊でありながら皇帝候補者に選ばれるまでのカリスマを得たのだ。

「よくわかった。弱くなってもいい」

「わかったんならそれでいい」

ふんぞり返ってタイタスが言う。

「ユアンが俺の弱みになってもかまわない。俺がそれ以上に強くなればいいだけだ」

ロレンスは馬の縄を木から解いて、足早に歩き出した。

「おいおい、もう水浴びはいいのか」

その足が、自然と速さを増していく。

「帰ってユアンの顔を見てくる」

ロレンスは山道を併走させるように加速しながら、器用に馬に飛び乗った。

今朝は一番に、本当はユアンの顔を見たかった。
彼が本当に無事で居るのか、そこで眠って、生きているのは幻ではないのか。
だがそうやって不安を抱えている自分自身の弱さが気になってそうしなかった。
弱みを許容した今は、一刻も早く会いたくてしかたがない。
はるか背後でタイタスが
「それ以上に強くなるつもりなのかよ…」
と呟いたことは知るよしもなかった。

◆タイタス・ラムが知らないこと

肌を流れる水が冷たすぎるのが今のタイタスにはちょうど良かった。
今朝起きたら全身がカッカしていて、どうしようもなかったのだ。
こんな時に泳げばいいというのは初めて知った。
泳ぐこと自体、千年迷宮城から脱出して湖を渡ったときが初めてだったのだ。
前にも何度かこういうことがあった。
幼いとき、路上で面倒を見てくれていた姉代わりのエイダが死んで、自分も死ぬのだろうかと思っていたのが、それでも立ち上がる勇気が湧いてきたとき。
探偵のメサイアの策略どおりに牢へ送られる決意をし、盗賊団の終わりを悟ったとき。
そのメサイアに迷宮城で再会し、二人きりの部屋に閉じ込められてようやく復讐の機会が得られたと思ったとき。
決意とか、悟るとか、ずっと自分の気持ちが体を高揚

させているのだと勘違いしていたのだが、最近のタイタスにはそうじゃないことがもうわかっている。
それは自分の意思とは関係ない。
彼は気付いていた。
自分の運命が変わるときに、自分の血がそうだと教えてくれているのだということに。
ユアンが助け出されたことは、ひとつの決着のはずだった。
だが昨日よりさらに血が騒いでいるということは運命はこれからやってくるのだ。
どこからともなく、確実に。
ざわっと沢の側にある下生えが揺れて、一頭残された黒毛が落ち着かない様子で地面を踏んだ。
ロレンスのものとは違う馬の気配、そして気配を押し殺している誰かがそこにいる。
「…誰だ？」
茂みを睨み付けると、マントで頭から足まで覆い尽くした人影が現れた。
「…なんだ、それならそうといえ」
「先客がいるとは知らなかった。隠れ家へ行く前に馬を休ませたかったもので」
長い距離を走ってきたばかりなのだろう、馬が荒い息を吐きながら全身で息をしている。
メサイアはフードを取り、タイタスの馬とは別の所に自分の馬を繋いだ。
「こいつにはまた走って貰わなければならない」
水をすくって胴にかけ、クールダウンしてやりながら均整の取れた鹿毛を労っている。
その馬は迷宮から脱出してその夜に合流したあと、タイタスが調達してきたものだった。
メサイアの馬に対する優しい手つきや声色をきいていると、なんだか息苦しくなり、タイタスはまた水中に潜り込んだ。
そのまま勢いよく岸辺へとあがる。
おかげで雨のように降りかかってきた雫を事務的に払いながら、メサイアは水辺に膝を付き、手と顔を洗い始めた。
いつもはピンとしている背中が丸められ、前屈みになった体に重いマントが沿って、すらりとした体躯が露わになる。
その背中を見ていると、彼が盗賊団を卑怯な手ではめたことを詫びた時の姿が頭をよぎった。
この探偵は迷宮の中でたった一度、道を譲って欲しいと

タイタスの前に跪き、自ら頭を下げたのだった。
　そのことはタイタスしか知らないことだが、メサイアのあのような姿はこれから先、もう二度と見られないだろう。
　軍の詰め所から盗んだズボンとブーツを履きながら、タイタスは彼が頭を下げたその理由に思い当たった。
　あの時メサイアはユアンを救うために、自分に膝をついたのだ。
　プライドの高い彼が、そこまでして手に入れたかったものはもう手に入ったのだろうか。
　ユアンなら無事に生きてこの土地にいる。

「なにを見ているんだ」
　水面から顔を上げ、ふいにメサイアが振り返った。
「お前を見ているんだ」
　正直に答えると、メサイアが鼻で笑う。
「それで?なにか思うところでもあるのか」
「なにも思わないから見てるんだろうが」
　以前なら見る前に殴りかかっていっただろう。
　その笑い方もなにもかもが気に入らなくてしかたがなかったのに…
　ふとメサイアがまじまじと見返してきたので、その目をまっすぐに見ることになり、タイタスはますます不可思議な気持ちに捕らわれた。
(なにを暢気にこいつの目の色なんか眺めてやがるんだ、俺さまは…)
　メサイアの目の色は怒ると紫がいっそう濃くなって、黒に近付いていく。
　その色なら何度も迷宮で見た。
　しかし今は穏やかに、どちらかといえば冷たいほど浅い瞳をしているのだった。
　むしろこちらの彼が本来の姿なのだろう。
　ただしタイタスは、激高して我を忘れる寸前の彼の様相がかなり気に入っていた。
　あれを見ると、自分の頭もカッと血が登っていい具合に拳に力が入る。
「お前はもう、怒ってないんだな」
　メサイアが小さく呟いたので、タイタスの心臓が鳴った。
　それはあまり考えたくないことだった。
　まさかこのタイタス・ラムが盗賊団を潰したこの男への怒りを失くしてしまうとは。
「っと…お前は俺さまのことはまだ怒ってるんだよな」
「当然だろう、盗人を許す探偵などいない」
「俺さまが盗んだ服を着て、俺さまが盗んだ馬に乗っている

くせに…」
「終わったら全て返すぞ、もちろん」
「ぱんつもか」
「下着もだ」
　いくらか銀貨を添えてな、と固い声で言うのでとくに反論も出来ずにただ頷くほかはなかった。
　滝の音が鳴り止まない中、二頭の馬が向かい合って新鮮な草を黙々と食べている。
　水際の岩の上に離れて座りながら、タイタスはまたあのなんともいえない妙な気分を味わっていた。
(こいつといるのがもう普通になっちまってるし…)
　二人きりで居て、なんの違和感も感じないのだ。
　むしろこうやって二人で居るのが自然なような…
(いったいなんでこうなっちまったんだよ)
　それは迷宮城脱出後に示し合わせて密会した時からそうだった。
「俺さまが怒ってないのはさ…これは無理だな、と思ったからじゃねーかな」
　タイタスはぽつりと言った。
「無理?」
「お前、湖に暗号残していっただろ」

　盗賊団には字の読み書きが出来るものが少ないので、自分たちで連絡を取り合うために作り上げたのがその暗号だ。
　記号を分けて、それぞれ子供の団員が覚えられる量だけを覚えさせ、それを幹部がグループ分けする。
　グループで行動すれば、それぞれが覚えている暗号を合わせて、多少複雑なメッセージでも読み解けるようになっていた。
　それをこの男は解読どころか完璧に使いこなし、盗賊団のリーダーである自分だけに落ち合い場所を伝える手段として、あの場で臨機応変に利用してきたのだ。
　その能力には舌を巻くしかなかった。
「あれを見たときな、お前は卑怯な手なんか使わなくてもそのうち盗賊団を一網打尽にしただろう、俺さまはまんまとお前に捕まっていたんだろうとわかったんだよ。もとからメサイア・リードから逃げることなんかできなかったんだってな」
　メサイアはこちらを見ずに少し唇の端を上げた。
「記号学は僕の専門だし、そもそもあれは解くのに時間がかかるような暗号ではなかった。子供でも覚えやすいようにできている、いわば文字の一種だと思ったよ。教育の機会もない子たちにはあれが使えてありがたかったはずだ」
　盗賊団としての連絡だけではない、遊ぼう、会おう、好

きだ、嫌いだ、いろんな幼いメッセージを町で見かけた、とメサイアは話した。

　盗賊団でない子供たちの間でさえ、その暗号を使うのが流行っている節があったという。

　その声は説明しているというより、どこか懐かしむように穏やかだ。

「僕が謝りたかったのは、僕自身に後悔があったからだ」

メサイアが言うのでタイタスは驚いた。

―こいつが後悔だって？

「卑怯な手を使って子供たちの気持ちを傷付けたばかりじゃない。僕はあの血統復古党に手を貸すために盗賊団を罠にかけた」

　それはタイタスがオーガストの屋敷から盗み出した、千年迷宮城の地図を奪うためだった。

　地図を奪うことも血統復古党の迷宮城を巡る皇帝とユアン暗殺計画の中に入っていたのだ。

「あの工作を受けなければ、僕は忠誠を疑われるところだったのだよ。組織から暗号鍵を回収したり、数々の証拠集めに奔走していたがために疑われ始めていてね」

「その証拠を使えばたしかユアンの無実を証明できる？とか言ってたよな？」

「真犯人を炙り出すための証拠だから、結果的にそうなる」

「だったらまあ仕方ねえっつうか、お前が忠誠を疑われていたら皇帝候補として迷宮城に派遣される計画は中止になってたかもしんねえし。そんでユアンはオセロにまんまと殺されてかもしんねえ」

　俺たちもな、とタイタスはこっそり頭の中で付け加えた。

　素直に認めるのは癪にさわるが、自分たちが生き残るためにはメサイアの頭脳が欠かせなかったのもまた事実だった。

「僕がなによりも後悔しているのがなんだか知っているか？」

　メサイアに問いかけられ、頭をひねったがなにも思い浮かばない。

（そもそもこいつが後悔とかそっから想像もつかねえっての）

「それは盗賊団を潰したことだ」

「はあ？」

　思いもよらない返事で、タイタスは思わず背中をのけぞらせた。

「組織からの指令があって、僕はお前たちを追い始めた。だが実際に評判を聞くと町の人は盗賊団の壊滅など望んでいなかったのだよ」

メサイアは静かな声で続けた。

「むしろ悪ガキの犯罪や悲劇が減って、行く当てのない子供たちをどうにかするという、自分たち大人がやらなければならないことを肩代わりしてくれている、そういう風に見る向きが多かった。そのことに僕は驚いたものだった」

それはそうだが自分たちは人から盗んで生き延びてきたのだ。

いつかその報いが来ることはタイタスにはわかっていた。

たとえ十九で縛り首になろうが、それでも十九までは生き延びられるのだ。

エイダから盗みを教わっていなかったら、そこで自分の人生とたくさんの手下の生命は終わっていただろう。

「それに知れば知るほど…」

珍しくメサイアが言葉を濁したので、

「なんだよ」

とタイタスは改めてメサイアを振り返った。

今日は珍しいことばかりだと思う。

いつも上から目線の性悪が、言葉を選びながら懸命に言い訳をしているのだ。

だからタイタスは期待してしまう。

いままでたくさんの子供たちが自分の前に現れ、皆自分の後ろを歩きたがった。

それは実際大人たちもだ。

だが隣を歩いてくれる相手はいなかった。

自分はもしかしてその者に出会えているのではないかと。

「僕が育った『紅の光』よりは余程マシだと…むしろ子供の僕がこの団の一員ならどう暮らしていただろうと考えて、しばしば楽しい気分に浸ったものだった」

つまり彼はタイタスの盗賊団を気に入っていた故に、潰したことを後悔しているということなのだ。

そしてそれは彼にとって最大の褒め言葉であるに違いない。

メサイアがこちらを見ないので、タイタスはまたあの息の詰まる思いがした。

「さて、もういいだろう」

馬も充分に休息がとれた頃合いだろうとメサイアは立ち上がった。

滝からこぼれてきた水飛沫や落ちてきた葉をマントから払う。

「皇帝暗殺の首謀者を上げることができれば、ユアンは無罪になる」

「うまくいけばそうなるんだよな」

「それは僕が必ずそうしてみせる。そしてそうなったら、

ユアンは皇帝になるだろう」

「ああ？永久牢送りから一転、今度は皇帝かよ！すごい立場の変わりかただな！」

「宰相のイスカリオット・ムーアはとことん融通の利かない男だが…」

「ああ、あいつか…」

牢で会った酷薄そうな金髪の長身を思い出し、タイタスは眉をしかめた。

ああいうのはどうも苦手なタイプだ。

それにイスカリオットはユアンを永久牢という名の地獄へ突き落とそうとした張本人だった。

「融通が利かないということは、つまり原理原則主義者だということだ。首謀者が他に居るとなったらお前たちは無罪となる。そこで原則に従えば、お前たちはやはり皇帝候補者だということになるわけだよ」

お前たちは、という言い方が引っかかったが、なるほどとタイタスは頷いた。

「それでみんながユアンを皇帝に推すとなると、あいつの立場は一転して皇帝陛下ってわけか…」

「お前が真の皇帝になる夢はかなわないかもしれないが」

メサイアが淡々というので、逆に気を遣っているのだなとわかる。

「真の皇帝って響きはまあ今でも魅力的だが、俺さまの欲しいのは肩書きじゃねえから大丈夫だ」

メサイアが馬に乗る。

これから隠れ家へ向かうのだ。

このあとはあまり二人きりで話す余裕もなくなるだろう。

「真の皇帝ってのは仕事の中身の話だし、それをユアンがやるっていうなら俺さまは喜んで手伝うだろう。ただしあいつは俺の手下であり弟分だ。あんまり虐めると容赦しねえよ」

「そっちこそ。あまり甘やかすと容赦はしない」

少し歩を進めて振り返る。

「ただ、ユアンがいなければ、僕はお前を皇帝に就けていただろう」

あまりにも突然だったので、タイタスは動作の一切を停止した。

血だけがどくどくと全身を遡ってくる。

「真っ赤だぞ」

笑い声を上げながら、メサイアが馬の尻を蹴った。

あっというまに木漏れ日の山道を下っていき見えなくなる。

「からかいやがって！」

一瞬の猶予もなく、今度は服を着たまま滝壺に飛び込

むしかなかった。

そうでもしなければ火が付いてしまう。

タイタス・ラムの血はこれが運命だとうに知っているのだった。

◆メサイア・リードが知らないこと

タイタスから思ったとおりの反応が得られ、口元に満足げな笑みを浮かべながらメサイアは馬を走らせた。

嘘を言ったつもりはないが、あまり信じてはもらえないだろう。

信じてもらえないままでかまわないと思う。

穏やかな田園のでこぼこ道を下っていくと、昨日までの閉塞感が嘘のように晴れていく。

空の青のところどころに羊のような雲が浮かんで、午前の光に縁（ふち）取られた果樹園の緑が目にも鮮やかだ。

こんな穏やかな景色はいったいいつぐらいぶりなのだろうとメサイアは目を細めた。

迷宮城を出てから常に騎士団やソレム軍に追われていたが、一番危険なのは血統復古党（サングィニスト）の連中だった。

彼らは裏切ったメサイアを許さないし、彼が握っている情報を皇城に持ち込まれることを一番に恐れている。

そして血統復古党（サングィニスト）の工作員がそこらの警備隊員よりよほど身を隠すのにも長（た）けており、暗殺の技術も存分に仕込まれていることはメサイアが一番よく知っていた。

連中に見つかれば命はないので、メサイアは用心して身の軽いタイタスだけを選び、真っ先に彼と合流することにしたのだった。

実際に二人きりになり、動いてみると思ったより阿吽（あうん）の呼吸が取れたのは収穫だった。

そうやって計画通りに物事が進んだのはいいが、最大の難点は怪我をしたユアンと、ただでさえ目立つこの皇帝候補者たちをどこへ隠すかということだった。

そうしてギデオンがこの場所を指定してきたときは、やはりな、という思いがあった。

メサイアがこの村を訪れるのは実は今回が初めてではない。

以前、ギデオンの身上を調べた際に一度見て回っている。

だからあの滝壺のことも知っていて訪れたのだが、まさ

か先客がいるとは思いもしなかった。

それがタイタスだと気付いたと同時に、自身が彼とここで出会うことになんの疑問も感じていないことにメサイアは気がついた。

村の中で自分が気に入った場所に、彼が居たことはきわめて自然なことだった。

メサイアにとって偶然は必然だ。

つまりは二人の好きな場所が似ているというだけの話だった。

タイタスも意外な場所での再会に、あまり驚いてはいなかったようだった。

むっつりと口元を引き締めたまま、そこら中に水を跳（は）ね散（ち）らかし滝壺から上がってきた姿を思い返す。

張りついた黄金の髪が水の反射光と木漏れ日を同時に受けて、それ自体が光を放っているように見えた。

滑らかで幾分濃い色の肌の、引き締まった肉体を誰が相手だろうが隠そうともしない。

彼は姿形も態度もまるで生まれつきの王者のようだった。

実のところメサイアはタイタスを何から何まで丸ごと認めているわけではない。

自身の王に選ぶならユアンの次にあの男がいいと思う、ただそれだけだった。

ユアンがメサイアにとっての「夢」ならば、タイタスはある意味「理想」なのだ。

タイタスの盗賊団を見てきた彼だからこそ長所も欠点も知り尽くしているし、彼と造る国はそれはそれで楽しいに違いないと、ひそかに考えることもあった。

だがもし共にユアンを支えていけるなら…

そう考えるとどこか胸が浮き立つような心地になって、メサイアは居心地の悪さを感じた。

それは今までに彼があまり経験したことのない感覚だった。

タイタスだけではない、迷宮城で出会った皇帝候補者すべてに感じる居心地の悪さだ。

彼らと居ると、あの「紅の光（ルブルムルクス）」で育ち、工作員として暮らしてきた薄暗い自分がどこかへ消え失せるように感じてしまう。

そうして正義と真実を求める「メサイア」こそが本当の自分だと、そう思える瞬間がある。

そのことに甘さと戸惑いを覚えながら、自分はそれに耽溺（たんでき）してはいけないのだと、頭のどこからか冷えた声が聞こえてくるのだった。

「なんだ、メサイアか」
厩に馬を繋いでいると、オーガストが姿を見せた。
今日はシンプルなエプロンドレスに、お下げにスカーフという出で立ちだ。
多少わざとらしいうえに、顔立ちが可愛らしくて目立つきらいはあるが、どこからどう見ても村娘そのものだ。
華美に女を演出しなくても、生まれつきの少女のように見えてしまうのはテクニックなのか、本人の容姿なのか。
「ユアンの顔を見に来たのか？」
「それもあります」
短く答えると、少女らしからぬ動作でぐいと民家の扉を示す。
「いいけどそっとだぞ」
「まだ意識は戻らないのですか」
訊ねるとハアッと大きくため息を漏らした。
「いや、ユアンは眠っているがまあ問題はない。問題は側に張りついてるやつだよ」
足音を立てないようにして、ユアンが眠るという部屋に入るとその意味がわかった。
そのベッドの脇にまるで番犬のようにロレンスが張りついている。

こちらを睨み付けてきたのは、メサイアの背後でオーガストがミシリと床を鳴らしたせいだ。
ベッドの反対側にはザンが座っており、気配を感じ取ったのか、メサイアに向かって微笑みかけた。
その暖かい静寂の中――
整えられたベッドの中でユアンは安らかに眠っていた。
想像していたより顔色が良い。
開いた窓のカーテンが静かにそよぐたびに、すぐ側の果樹から風に乗って入り込んだのだろう、白い花びらがふわりと枕元に舞い降りた。
夢を見ているのか、時折寝息が小さい呻きに変わる。
そのユアンの症状の変化ひとつ見逃すまいとでもいうように、ロレンスが彫像のように控えているのだった。
メサイアがユアンのほうに身を乗り出すと、ザンが少し身を引いてくれたので、それをいいことに彼はベッドの上にさらに身を乗り出した。
ほとんど覆い被さるようにして、ユアンの顔を眺める。
ロレンスが身じろぎしたのを感じたが、それにはかまわず少し身を起こし、今度は胸の上に掛けられていた毛布を剥ぎ取った。
「メサイア…？」

抗議するようにオーガストが小さく声を上げたが、それにもかまわずメサイアはユアンの寝間着の前を開く。

さすがに大人しいロレンスも少し気色ばんで腰を浮かせた。

なにか問いたげにメサイアを見る。

だがそれでもメサイアは気にとめなかった。

自分はとうとう真の王（ユアン）を手に入れたのだ。

彼はメサイアが夢見ていた至宝だった。

この世に絶望しかけた幼い日から、あると信じてその存在だけを追ってきた。

そうしてあの迷宮城で出会い、自らの王と認めた後は彼を無事に脱出させることだけを考えていた。

脱出したその後の道も茨（いばら）だった。

永久牢に落とされるギリギリの淵（ふち）から、ようやく彼の手の中に戻ってきたのである。

もはやユアンはメサイアにとって大切にしなければならない、壊れやすい宝物だった。

傷は付いていても構わないが、それがいかほどかは把握しなくてはならない。

ロレンスの咎（とが）めるような視線を痛いほどに浴びながら、メサイアはユアンの手当の様子を確かめた。

ロレンスがそれでも手を出してまで止めようとしないのは、彼がユアンを傷付けたりしないことをわかっているからだ。

ひととおり検分すると満足したので、メサイアはユアンの着ているものや毛布をきちんと元に戻し、ベッドから離れた。

そしてものも言わずに部屋から出る。

「おいおい、ちょっと待て」

玄関を出ようとしたら、オーガストが慌（あわ）てて追ってきた。

「お前、ほんとユアンの顔見に来ただけか」

「いえ、それとギデオンに用がありました」

メサイアは懐から書類の束を取り出した。

ギデオンにはこれからユアンの無実を証明するうえで、法律関係でいくつか訊ねたいことがあったのだが、出かけているようならこの彼に預けておいても構わないだろう。

オーガストはそれを預かったものの、まだなにか言いたそうにしている。

「なにか」

「う…ん、お前には言いたいことがたくさんあったんだよ」

厩（うまや）まで付いて来ながら言う。

腕を組みながら大股で歩く姿はいっぱしの事業家を思わ

せるが、少女の容姿がちぐはぐでメサイアは密（ひそ）かに笑みをかみ殺した。

「湖で死んだふりをしたのが気に入らないとか、オセロのこととか…けどまあ…」

オーガストはやれやれと首の後ろを掻いた。

「ユアンを助け出せたのはお前のおかげだから感謝する」

ユアンを救い出す努力をしたのは自分のために他ならなかったが、メサイアは口に出さなかった。

それでも彼らが礼を言うのがわかっていたからだ。

「枢密院会議でも頼んだぞ、メサイア！」

背中を思いきりどやしつけられて、意外にも力強いその手に押されるように、彼は再び村を立った。

隠れ家に戻り、会議に提出する証拠品の整理をしなくてはならない。

メサイアはフードを目深に降ろし、馬を駆るスピードを上げた。

もうすぐメサイアはメサイアでなくなる日がやってくる。

彼はソレムの首都大学ですでに数学者のアマデウスとして名を知られていたが、一方で探偵をやりながら反政権組織の一員として工作を行っている身だった。

メサイア・リードとはそのための仮名に過ぎない。

さらにその仮の名は、工作活動を名目として自由に行動し、密かに組織を裏切りながら真実を追い求める手段でもあった。

ユアンの無実を証明するため公の場に出ることになれば、それがうまくいくにせよ、いかないにせよ本名のアマデウスに戻ることになる。

そうして皇帝の命を奪った組織の一員として、ただちに拘束されるのだろう。

裏切り行為の功績でたとえ縛り首は免（まぬが）れたとしても、おそらくは一生牢に入ることになるのだ。

それは同時に探偵だった自分が終わることを意味していた。

だがしかし、それでも彼らはまだメサイアの見えないところで彼をメサイアと呼び続けるだろう。

その甘く、居心地の悪い場所とユアンを守るためなら、メサイアはたとえ牢の中からでも自身を捧げ続ける覚悟は出来ているのだった。

◆オーガスト・モーガンが知らないこと

メサイアの馬が土埃を上げながら去って行くのを見送りながら、オーガストはなんともいえない気分に包まれていた。
実際あの男はなんなのだろう？
オーガストは小さい頃から叩き込まれた要領で、人間観察には長けていると自ら思っていたが、メサイア・リードに関してはなかなか全体像が掴めないでいる。
迷宮の中でも怪しいとはずっと感じてはいたが、探偵が仮の姿でまさか本業がテロリストの一員だとは、とうとう見破ることが出来なかった。
結果的には彼は味方で、それもかなり熱くユアンに尽くし、一行を助けてくれてはいるのだが…
あれだけなにもかも計算づくの男が、ただ一心に夢のために我が身をすり減らしている—
そこが損得勘定で生きてきたオーガストには、いまいち理解できないところだった。
しかもメサイアときたら、本音を隠しているようで、時おりポロリと素直な自分を見せたりするものだから、ますますわけがわからない。
（もしもメサイアが皇帝に選ばれたら僕はどうする？）
オーガストは想像してみる。
たぶん僕は、彼に少し恐れを抱くだろう、とオーガストは考えた。
そして時には不審も抱きながら、その鋭利な判断にひたすら付き従うことになるのかもしれない。
その存在にどんどん心惹かれながら…。
（まあこれからどうなるかもわからないし、どうにかなっ

たところで七侯を辞退して家業に専念する道もあるわけだからな）
どちらにせよ、そして誰が皇帝の位に就くにせよ、それに背を向け商売人として生きていくのか。
それともどっぷり国の運営に足を踏み入れるのか。オーガスト・モーガンにとっても岐路がすぐ目の前に訪れているのだった。

メサイアと入れ違いのようにして、ロレンスが家の外に出てくる。
オーガストに気がつくと、言い訳のように
「少し頭を冷やしにきた」
とぽつりと呟いた。
またこいつは自分にわけがわかんなくなってるんだろうなあと、オーガストはため息をついた。
「メサイアのことは気にするなよ。あいつはアレでユアンを守るのに必死なんだから」
「ああ」
短く答えて、ロレンスは井戸から汲み上げた水で顔を洗い始める。
オーガストには彼の戸惑いがなんとなく感じ取れた。
ロレンスは素で感情が表に出ないたちだから、付き合いの長いオーガストでなければなかなかわからないことかもしれない。
今、彼の胸の内側では嵐が起こっているに違いなかった。
メサイアがユアンをあんなふうに乱暴に我が物として扱ったことがその原因だ。
「お前はユアンのことになるともうめちゃくちゃだな」
というと、オーガストを見上げたロレンスの青い瞳が揺れた。
まるで初恋を知った乙女のようで、とても見てはいられない。
迷宮城から出た後のロレンスはユアン本人ではなく、ユアンを想う気持ちの強さを扱いかねているようだった。
豪商モーガン家の子息はそれぞれ子供の時分から地方の貴族と懇意にするのが習わしで、家長が皇帝エルバートを後押ししていたこともあり、オーガストは小さい頃からよくその親戚筋であるアクロイド家を訪れたものだった。
もちろん出会った時にはロレンスが皇帝の一人息子であることはわかっていた。
彼は養子先で暖かい人々に囲まれてはいたが、どこか陰のある少年だった。
唯一の肉親である父親である皇帝が、もっぱら国家の

み愛を注いでいたのが原因かもしれない。

そのこと自体はある意味立派なことでもあったから、父を責めようもなく、ロレンスはただ自覚もなく孤独で居るしかなかったのだった。

オーガストは二歳年下の不器用な彼を哀れにも思ったし、身長をはるかに追い抜かれたのはともかく、常に弟のように接してきた。

ただ、どこかに（こいつは自分とは違う）という思いがあったのも確かだ。

人格、素養、能力。

商売人の目から見ても、これほど上等な素材にはめったにお目にかかれないものだ。

生真面目で素直、人を裏切ることのない彼はいつも周りの好感を一身に集めていた。

ただ本人がそれに気がついていないだけだったのだが…。

（そういうところもこいつはオイシイよな）

とオーガストは考えていた。

事実、皇帝に心酔していた騎士団はもれなく密かにロレンスのシンパだったから、滅びた帝国の血を引くだけの平凡な少年のために皇城を出奔したと知れたときにはおおいに肩を落としていたことだろう。

「お前は本当に面白いよなあ」

そういうとロレンスは少しムッとした顔になった。

オーガスト以外にはそんな表情をみせたりしないから、ますますからかってみたくなる。

―僕は本当はお前が皇帝になればいいと思っていたんだ、それこそ幼かったあの日からずっと。

告白を人知れず呑み込んで、オーガストはにやついてみせた。

「早くユアンの元へ戻れよ。今度はザンが毛布を剥いで好き勝手してるかもしんないぞ」

「ザンはそういう人じゃない」

言いながらも慌てて立ち上がり、ロレンスは家の中へ戻っていった。

ふいに、自分はこれからもロレンスを見守っていくのだろうとオーガストは思った。

密かに敬愛を注ぎながらも、時には兄貴のように助け船を出しながら。

どんな境遇になったとしてもそれは変わらない、未来の決定事項だった。

ふと笑い声が聞こえたのでそちらを見ると、ずぶ濡れのタイタスが馬の後ろにギデオンを乗せて、ちょうど目の前の果樹園を抜けてくるところだった。

馬上でふざけ合う二人はどこからどう見ても旧知の間柄にしか見えない。

迷宮城にいるときには想像もしていなかった穏やかで楽しげな光景だった。

ギデオンとタイタスは本人たちの開放的な性分がどこか似ていたし、すぐに気が合って仲良くするだろうとは想像していたが、それにしても打ち解けるのが早い。

二人はオーガストの姿を見つけると、調子よく手を振ってよこした。

オーガストも面倒だなと思いながら振り返してやる。

「メサイアから預かってるぞ」

と書き付けの束を差し出すと、ギデオンが馬の尻から滑り降りながらそれを受け取った。

その場でざっくりと目を通していく。

「なるほど、帝国の刑法について、あとは諸領法のズレについてだな」

領法のズレとは七領の間にある法の違いを指している。

大きな法律は帝国全土で決められたものがあるからさほど問題にならないが、小さなものに関してはその七領でのズレが問題になったり、悪用するものもいるのだった。

「法律がなんだっていうんだよ」

タイタスが口を尖らせながら馬を降りる。

「そんなもんなんの意味もねえだろこの国じゃ。ユアンの助けになるのかよ？」

「いつもはたいして意味がないけど、今だけは違うのさ」

オーガストが言うと、彼はますます唇を尖らせた。

思わずそこに漆の葉でも貼り付けてやりたい気分にかられる。

「なんでだよ」

「皇帝が居られないからだ。勅令を下す者がいない間は、帝国は法律の下に動くこととなる」

教えてやりながら、ギデオンはいつもその状態が理想なんだけどなあ、と小声で付け加えた。

「ああそうか、あの意地悪メガネがげんりげんそく大好き野郎だから…」

合点がいったようにタイタスが言う。

意地悪メガネとはあの現宰相のイスカリオットのことだろう。

誰の入れ知恵か知らないがその通りだった。

そう、今はだからこそ法律も力のひとつになるのだ。

「僕も諸領の対応の違いなら少しは力になれるぞ。あっちこっち移動しっぱなしの人生だからな」

「じゃあわからないことがあったら少々訊ねるかもしれん」

言いながら書類をめくっていたギデオンの顔色がさっと変わった。

「これは…」

「どうかしたの」

「あの名探偵君め…」

口ごもりながらギデオンが数枚の書き付けを見せてくる。

「組織の仕事だか、なんの依頼だかしらんが、俺の身上調査書だ。この村の出身であることも出自も皆バレている」

「あの性悪、迷宮城に入る前からそんなことしてたのか」

とタイタスが忌々（いまいま）しげに言う。

ギデオンは調査書をめくりながら唸（うな）り声を上げた。

「メサイアは俺の主義主張からユアンを手にかける可能性については早くから気付いていたようだが、まさか生い立ちまで調べられてるとは思いもよらなかった」

「皇帝候補者になりそうな人物の調査ならモーガン家だって済ませているぞ。とくにあんたは有力候補だったろう。全部隠したままで済むと思ったのかよ」

すまし顔でいうと、ギデオンが目を剥（む）いた。

「あのな…そういうことはな…」

「情報は握っていることすら口にしないことに価値があるんだぞ」

なので黙っていたが、オーガストはこの村がギデオンに関係する土地であることは知っていた。

なにせここは帝国が誇る大貴族のロックフォード家の荘園だし、ギデオンがその家長の落胤（らくいん）で、たった一人の男子であることは間違いがないことだった。

皇帝より貴族が力を持つこの帝国で、真の意味で王子と呼べるのはギデオンなのかもしれない。

だからその王子がこんな素朴な村に住んでいたのは意外だったし、思いもよらないことだったが、既成勢力に抗うギデオン自身の生き方を見れば、同時にそれも自然なことだと納得もできる。

ともかく、ソレム軍はロックフォード家の私兵とも揶揄（やゆ）されているほど密接な関係にあったし、軍とライバル関係にある騎士団なら余計に荘園にはそうそう立ち入れない。

おまけに村人たちは、ギデオンを小さい頃から知っており、彼の母方の家と代々親しんでいたことも手伝って、すっかり彼らの味方なのだった。

そういうわけで土地の者がそれとなく見張ってくれていることもあり、おかげで一同はこの世で最も追っ手のかかりにくい場所でのんびりと過ごせているのだった。

しかし考えてみると、貴族制度を否定しながらその大貴族の土地に守られているという構図はかなり間が抜けてい

る。

ただしその矛盾も呑み込んでいるところがギデオンの経験の厚みやしたたかさ、人格の柔らかさを感じられて、オーガストには好ましく思えた。

この先商売人としてやっていくとしても、付き合っていきたいと思える人物だ。

もちろんそこには損得勘定も存在するし、加えてオーガストは実のところ、ギデオンが時おり彼を本当の少女のように扱い、甘やかすことに悪い気もしなかったのである。

夕方になって、民家はひっそりと静まりかえっていた。

昼にギデオンがメサイアと合流するためにソレムへ、タイタスが皇城の様子を見るために出て行ったために、残ったのは静かにユアンに付き添うザンとロレンス、そしてオーガストのみとなった。

村の老婦人が夕食の世話に来てくれた以外は来客もない。

片付いた食卓でメサイアに言われて集めた血統復古党（サングイニスト）の暗号鍵のリストを作っていたら、そうっと音もなくザンがやってきて手を差し出した。

「少し散歩に付き合ってくれますか、お坊ちゃま」

オーガストは黙ってその手を取った。

彼にそう言われたら、何度だって大人しく従うだろう。

ザンがオクト＝ノクテ領の人気歌手として頭角を現す前から、モーガン家は彼を贔屓（ひいき）にしてきた。

なので十代の頃からたびたび顔を合わせていたし、時には私邸での休暇に楽団ごと付き合って貰うこともあった。

もちろんそこにアクロイド家の面々が加わることも珍しいことではなかった。

だからこそザンは迷宮城で出会ったときに、ロレンスのことも足音で判別がついたのだ。

そこにはたまに皇帝もお忍びで来ていたはずなので、ロレンスが皇帝の息子であることは最初からザンにはわかっていたはずだった。

「虫が鳴いていますね」

家を出て庭へ回ると、ちょうど陽（ひ）が落ちたところで、空にはまだ明るい光が残っていた。

果樹園から涼やかな風が吹いてきて、二人の周りを花の香りや夜の虫の鳴き声が賑（にぎ）やかに取りまいている。

「さっきはこの庭は蜜蜂だらけだったよ」

光溢（あふ）れる庭で、羽根を輝かせながら行き交う小さなものたちを見せてやれたらよかったのにとオーガストは思った。

沈んだ直後の夕日が空に残る不思議な色合いも、にじみ

始めた小さな星々も、もしもザン・オーデュポンの目に映ったならば。

そこにいったいどんな詞や音楽が生まれてくるのか、オーガストには想像もつかない。

「もしユアンが皇帝になったらザンは歌をやめるの？」

問うと、ザンは少し考えるようにして

「そうですね」

と言った。

「おそらく人前で歌うことは難しくなるでしょう。歌手というのは、もてはやされてはいてもまだまだ卑しい職業だと思われていますし、続けることでユアンの迷惑になるなら、そちらの仕事をあきらめることになります」

「ユアンは迷惑だなんて思わないと思うよ」

わかっているとでもいうように、ザンは微笑んでみせた。

「歌うことを止めるとは言っていません。貴方が聞きたければいつでも聞かせて差し上げますよ、お坊ちゃま」

「そのお坊ちゃまっていうの止めようよ。もうパトロンと芸術家の間柄じゃあないんだし」

「それではどういう関係なのですか？」

ザンが深い笑みを浮かべた。

いつもより少し口角を上げたこの笑みは、普段物静かな彼が相手を追い詰めるときに見せる表情なのだ。

「どういうって…」

真っ先に心に浮かんだ「同僚」という言葉を気軽に口をするのはためらわれた。

「オーガスト、貴方もユアンが大切ならばそろそろ心を決めるべきです」

ユアンは大切だった。

いつの間にそうなったのかはわからない。

浸水の増すあの迷宮城の大広間で、少女の姿で戸惑っていたオーガストを力強く導いてくれたのがユアンだった。

自分が本物の少女なら、あの時ユアンに恋していたかも知れないと思う。

そのあとはもう彼が危険に陥るたびにいてもたってもいられない心地だった。

オーガストだけではない、ユアンに対しては皆が同じ気持ちなのだろう。

彼らはだからこそひとつになれたのだ。

ユアンさえいれば、皆がひとつにまとまってどんな困難でも乗り越えていける気がするのだった。

ただ、それがいきなり帝国を背負うという話になると…

「僕は皆といると楽しいし、この先も付き合っていけたらなと正直に思うよ。だけどきっとユアンが皇帝になったらそれだけじゃ済まない」

「それだけじゃ済まないから、貴方に居て欲しいんですよ、オーガスト。私は貴方の仕事のやり方を知っています。その有能さがこの国にとって必要なことも」

ずいぶん正面から口説いてくるなと思う。

ザンはそれだけユアンに真剣なのだろう。

「このままじゃいけないのかな」

空の星が急に数を増してくる。

「今日のこの一日のように、みんなでここでのんびり暮らせたらいいのに…」

「私もここが好きですよ。できればここにずっと住みたいぐらいです」

薄闇の中でまたザンが微笑む。

諭すように笑いながら、言葉の外側でそれは無理だと言っているのだった。

今日みたいな日はもう二度と来ないかもしれない。

オーガストは唇を噛みしめた。

だったら自分はそろそろ選ばなければならない。

モーガン家の繁栄のために働き、自由に各国を飛び回るのか。

国という重みを引き受けて民衆のために働き、皇城に繋がれるのか。

しかしそれ以前に―

七侯を辞退したところで、きっとみんなやユアンを放っておくことは自分には出来ないのだろう。

「お前たちがいっしょにいてくれるなら、それでも…」

オーガストの小声が虫たちの輪唱に解けて交わっていく。

「僕は、もしかして自由なままでいられるのかもしれないな…」

これからはひとりではなく、全員の翼で飛ぶのだ、と虫たちの鳴く声を聞きながらオーガストは思った。

◆ユアン・ジュノー＝イグニスが知っていること

岩肌は冷たくて、それ以外に触れるものはなかった。

目は開いているけれど、光のない世界でものを見ることはできない。

時おり足に触れ、乾いた音を立てる塊が、もしかしたら人の残骸なのかもしれないと気がついてユアンは叫びたい気持ちに襲われた。

ここには誰も居ない。

あの迷宮城の地下牢で目覚めたときのように、ユアンはひとりだった。

いつも側にいてくれたマーレ島の友人も、優しい兄も、もう二度とは会えないのかと思うと、ユアンの胸がなにか塊で塞がれたような気がして思いきり息もできない。

苦しくて、もがくように手を差し伸べたら、いきなりそれを暖かく包んでくれたものがあった。

ユアンは目を覚ました。

そこは暗闇だった。

ただ、さっきとは様子が違って、柔らかいものに包まれてとても居心地が良い。

「ここに居る」

すぐ側で静かに声がした。

ユアンの知っている声だ。

だれか知り合いが側にいるのだと気がついて、ユアンは思わず安堵で泣きそうになった。

「ずっとここに居る」

声がまた繰り返した。

自分の手を包んでいる大きな手を握り返し、ようやく楽になった胸にひとつ息を吸い込んで、ユアンはまた目を閉じた。

ひとりきりじゃなかった。

自分はひとりきりで暗闇で迷ってはいない。

ユアンはそれを知って、再び眠りに落ちたのだった。

BEFORE DAWN　夜明け前に

終わり

ごあいさつ

このたびはこの本を手にとっていただき、ありがとうございます。
以前相川さんとお話しした時、千年迷宮ネタをこぼれ話に聞かせていただいたことがありまして（今回のお話の内容ではありませんでしたが）、面白かったのでこぼれ話にとどめておくのはもったいないなと思っておりました。
ですのでそういったネタをショートストーリーとして形にしてくださるのは一読者の立場からありがたいなあと思いました。

今回挿絵という形で参加させていただきましたが、その時の苦労話とか楽しかった話しとかなかった？と聞かれましたのでそういう話を少々させていただこうと思います。
苦労したのは、自分が描きたくなるシーンとここは押さえておかないと！というシーンが多すぎて、時間さえあれば漫画で描いた方が楽しいんじゃないかと思ったところです。
あと、全体的にはしっとりしたお話なのに随所に現れるお笑いポイントとかがつい描きたくなってしまうのですが（例：タイタスのベッドに全裸ダイブのシーン、ロレンスの後頭部にタイタスのツッコミが入るシーン、ユアンの幼馴染双子の酒豪おやじ、他）全体の雰囲気を壊してしまうのもどうかと思って描きませんでした…。

困ったことは、基本的にタイタスが堂々と全裸なので、下半身を隠す方法を考えるのに困りました。
意外にもロレンスも脱いだので困りました。（全体的にしっとりしたお話なので雰囲気が…）
楽しかったことは普段と違う小説という形式の為、各キャラの内面が漫画の時より描写されているので、違った角度からの千年迷宮SSを読んでいるのが楽しかったです。
「千年迷宮」という事件を乗り越えて各キャラの運命の変化具合の差に気付くことがあり、そういう気づきも楽しかったです。絵で描けるのはほんのちょっとですが、そういう変化も表現できてたらいいなあと思っております。

「16th」では、マーレ島のみんなをちゃんと絵に描けて良かったなあと思いました。
デザインは用意されていても本編ではほとんど描く機会がありませんでしたので…
最後に、また読者としての立場からの意見で申し訳ないのですが、再びSSで千年迷宮を読める機会があればいいなあと個人的に思っておりますので、相川先生に期待しております。
読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。
読者の皆様にも楽しんでいただけたら幸いです。

花鶏ハルノ（表紙、挿絵担当）

このたびはこの本を手にとって頂き、ありがとうございます。
ここに載っているお話は「千年迷宮の七王子」という一迅社発行全4巻のコミックの番外編にあたります。
「BEFORE DAWN」は最終回間際の20話終盤を書いたもので、この本のための書き下ろし、「16th」は以前主人公ユアンの誕生日記念として今年５月にpixivにあげたものの再録になります。
「16th」のほうは物語の前日譚にあたり、キャラクターの誕生日になにかするというのは初めてで思い出深い作品ではあったのですが、今回花鶏さんが挿絵を描きたいとおっしゃってくれたので、ありがたくも再録する運びとなりました。

この「千年迷宮の七王子」はいったん4巻で終わりを迎えたのですが、熱いご支持を頂いたこともあり11月からコミックゼロサム誌にて、短期ではありますが続編が連載の運びとなりました。興味ある方は、そちらもぜひ見て頂けたらなと思います。
私は漫画「千年迷宮」では普段漫画のコマ割りとセリフを書いた「ネーム」というものを担当しています。もともと漫画描きなのもあり、文章は専門外ではありますが、キャラクターへの愛だけは伝わればいいなあと思いながら書きました。
拙いながらもこうやって文章で物語を書くというのは、漫画では描けない情報量の多さや心情を描き込むことができ、めちゃくちゃ楽しいなあと思います。また、商業ベースでは誌面を与えられることにも限りがある中で、こうやって好きに番外編を増やしていけるのも素敵だなあと思います。なにより花鶏さんの挿絵が頂けるのが俺得過ぎますので、読んで下さる方がいるようならば、いつかまたこんなふうにやれたらいいなあと思っています。

というか近々もう一冊作る予定ですので、気になった方はぜひ、私どものツイッターアカウントやpixiv内のBOOTHなどチェックして頂けると嬉しいです。

相川有（SS担当）2016/8

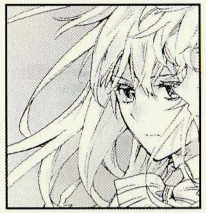
pixivID：15890113　Twitter：@aikawayou

16th

16th登場人物紹介

ユアン・ジュノー

辺境の島に住む少年。兄のアデルと二人暮らし。
このエピソードのすぐのちに皇帝候補のひとりに選ばれ
千年迷宮城での事件に巻き込まれていく。
平凡で天然気味だが、何事も諦めずにふんばっていく性格。



アナ・ベル

ジェド・ベル

文武両道に優れた双子の兄妹。
ユアンの幼なじみで、毎日三人で過ごしている。
ベル家の祖先はイグニス皇帝の重臣であり
両親もそのことを忘れずに暮らしている。
兄のジェドはお気楽な性格、
妹のアナは無口で冷静沈着、たまにツッコミが激しい。

アデル・ジュノー

ユアンの兄。
島の学校の教師をしている。
本当は実の兄ではなく
ユアンの旅立ちを予感している。
優しいがときに厳しい。
たまに弟に負けない天然ぶりを
発揮する。

L. A.

ユアンと双子が尊敬する剣士。
本名はロレンス・アクロイド。
武道を競う帝国杯無敗の騎士見習いで旧家の長男。
後に同じ皇帝候補者として千年迷宮城で
ユアンと運命の出会いを果たす。

マーレ島で生まれ、16の誕生日を迎えたユアンは
兄のアデルに意外なひとことを言われ動揺する—
「千年迷宮の七王子」本編の前日譚にあたるエピソード

(pixivにアップしたユアン生誕SSの再録で
挿絵は新しく花鶏が描き下ろしました)

「ユアン、本当はもうお腹が空いているのでしょ」
　いつもの抑揚のない声で、アナが言った。
風がびゅうびゅう吹いているので彼女はいま大声で怒鳴っているのだけど、それでも言葉に強弱が付かないのがなぜだかすごい。
　ユアンは俯いていた顔を少し上げた。落ち込んでいるのをあまり幼なじみに悟らせたくなかったのだ。
　とくにいつも落ち着き払っている同い年の少女には。
　崖の向こうに夕日が落ちて、今はほとんど目の高さにあった。
　地を這うように生える灌木、風にかき回される草の原、その向こうで乱反射する海。海峡の彼方にぼんやりと見える大陸の影や、まるで紙切れみたいに舞い降りる海鳥たちも。
高台の荒野のなにもかもがオレンジに染まっていた。
　ユアンのすぐ側にいる双子の髪も、揺れながら波のように輝いている。
　夕方の風景はそのすべてが美しいのに、どこか落ち着かない気持ちになってしまうのは、もうすぐ夜が来ると知っているからだろうか。
　そう遠くないうちに陽が沈みきって、このあたりも一面の闇に覆われるのだろう。
「いつまでも意地を張ってないで、帰りたいと素直に告白してもいいのよ？」
　日没が近いことをアナも感じたのだろう、ユアンをせかすように言う。
「べつに意地を張ってるわけじゃないよ…」
　小声で言ったから、きっと彼女の耳には届いていない。
　だけど自分の言いそうなことなんて、この幼なじみには全部お見通しなんだろうなとユ

アンは思う。
「ユアンはさ、腹はたぶんめちゃくちゃ減ってるんだけど、きっと胸の中がいっぱいなんだよ」
　ユアンの傍らに立つジェドが脳天気に言った。
「なんたって！十六才の誕生日だから！」
　と、肩を掴んで風に負けないようユアンに向かって声を張り上げるものだから、ちょっと耳が痛い。
　そう、今日は十六回目の誕生日だった。
　今年も去年と同じようにユアンはたくさんの人々から祝いの言葉をもらった。
　まず最初にベッドから起き上がるなり「おめでとう」と言ってくれたのは兄で、学校へ向かう道でも、教室の中でも、ユアンは出会う村人すべてから祝福されたのだった。
　もちろんその全員が顔見知りだ。
　手渡されたカードやさりげないプレゼントのおかげで、今日は登校用のカバンがぱんぱんにふくれあがっている。
「ふたりは先月だったけど、それでなにか変わったの？」
　ユアンは思いきって尋ねた。
　双子の誕生日は先月の半ばで、彼らはひと足先に十六才を迎えていた。
「べつにいつもと変わっていないわよ。ユアンも変わらないと思うわ」
　なにも変わらないなら、どうして兄はあんなことを言ったのだろう？
「今年はさ…俺が思ってるのとは違うみたいなんだ、なにか…」
　放課後まっすぐに家から帰らず、こんなところをうろついている理由。
　兄がお祝いの食卓を用意していると知っているのに、素直にそこへ飛び込んでいけない理由。
　それは朝、家を出るときに兄から言われた

ひとことのせいだった。

『もしかして…そうやって扉を開けて、ユアンも遠くへ行く日が来るのかもしれないな』

そう言ったアデルが微笑みながらも、なにかの痛みに耐えるような顔をしていたので、ユアンは少しショックを受けた。

兄ちゃんは本気でそんなことを思っているのだろうか…？

『遠くになんか行かないよ。だいたい島のどこに行ったってたいして遠くはないよ』

島の中とは言ってないよ、とまた静かに言われてユアンは絶句した。

マーレ島の外？

もしかして兄は大陸のことを言っているのだろうか？

同じ帝国内でも大陸に渡ればそこは別の領地だし、そんなところに知り合いはいない。マーレ島のこの小さな村の人々の顔しか、ユアンは知らない。

そんな自分がいったいどこへ行くというのだろう？

誕生日が来たからといって、いったい昨日の自分とどこが違うというのか。

「そういえばさ、十六才といえばもう皇帝候補に選ばれる年齢に入るんだよな」

ジェドが唐突に言い出したので、ユアンは驚いた。

「そういえばそうなんだっけ…」

「今回はそろそろ選出が決まってる頃合いだから、マーレ領からは誰が選ばれるんだろうって、南じゃその話で持ちきりみたいだ」

南というのはマーレ島の南側を指す。

マーレ領の領民はユアンたち集落のもの以外はほとんどが南側に住んでいて、大きな港や町、マーレ侯の住む古い城もみんな南側にあった。

皇帝候補といえば、たしかに今年の春はちょうど何十年かに一度の選出の時期だったことにユアンは思い至った。

帝国では皇帝も七国の領主も世襲が禁じられているために、血縁ではなくそれぞれの領内から自分の後継者を選び出す。

そうしてさらにその後継者の中から皇帝になる人物がひとり、選ばれるのだった。

そういうわけで領主がそれぞれ後継者に選んだものたちは、皇帝が決まるまでは全員が『皇帝候補者』と呼ばれることになる。

「もしかしたら、俺たちのうちの誰かが選ばれるかもよ？」

きっと帝国中の若者が、今も同じ言葉を言い合っているのだろう。

たしかに十六才ともなれば候補に選ばれる可能性が全くないともいえないのだが、ユアンにはずいぶん遠い出来事のように思えた。

のんきな口調で切りだしたジェドも本心ではそんなことなど考えていなさそうだ。

今のマーレ領主はもともと港を仕切ってきた古い家柄の出身だし、これまでもこの北の集落から領主に選出されたものはいない。

候補になる若者は、たいていがその名を帝国中に知られている有名人や名家の出身者ばかりだった。

たとえばここ最近毎回のように帝国杯で活躍し、少年たちの憧れの的となっているあの若い剣士の“L．A．”。

それから賊の集団を一網打尽にして、世間を沸かせている名探偵やら。

彼らには身近に迫った話題なのかもしれな

いが。

「そんな与太話をしてる間に日が暮れるわよ」

また抑揚のない声でアナが言った。

あたりを覆っていた光の色が薄まって、背中から吹いてくる風が少し冷たい。

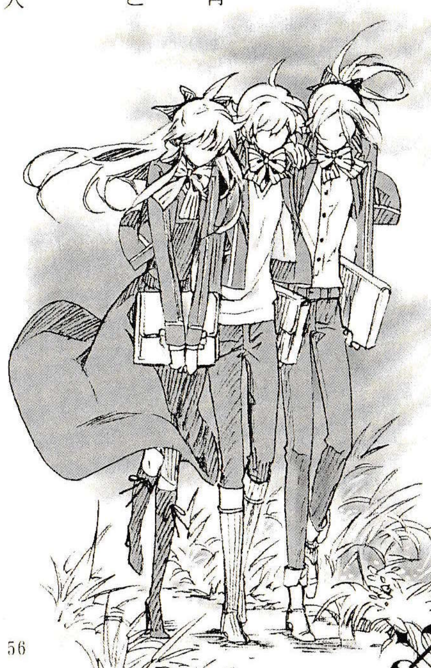
太陽の半分がもう海の向こうに消えようとしている。

暗くなると足元も見えなくなるので、三人は急いで高台から村のはずれへ向かう小道を下った。

生まれてこのかたそうしてきたように身を寄せ合い、風からお互いを守るようにもつれ合って歩いて行く。

村の明かりが見え始めた頃、ユアンはぽつりと呟いた。

「俺はこの先もこの場所でずっとこうしてると思うし、それだけでも精一杯なんだ」



最近の夢は兄のような教師になることだ。

兄は教師として優秀だし、知識も広くてなかなか追いつけそうにないけれど、将来は同じ仕事ができたらと思っている。

村で暮らして村の子供たちを教え、誕生日にはおめでとうと言い合える人々と生涯をともに過ごしていくのだ。

「そうね、ユアン」

アナの返事はいつもどおりの棒読みのはずが、今日はときどきやたら堅苦しく聞こえる。

どこか普段にはない感情を抑えているような感じがするのが、ユアンには少し気になるところだった。

「ユアン、突然なんだけど、俺が聞いた遠くの国の話をするよ」

ジェドが唐突なのはいつものことだ。

だからとくに気にもせず、ユアンは頷いた。

「とある辺境にいまは滅びた国の王子が住んでいて、そのことを王子自身は知らないんだ。でもまわりの人々はもと重臣の家系でもあって、王子のことをとても大切に思っている…」

「おとぎ話ね」

アナが少し呆れたように言った。

ユアンをのぞき込むジェドの顔はもう薄闇に紛れていて、その瞳だけが空の淡い光を受け、ガラス細工のようにきらめいている。

「みんなにとって王子が大切なのは、彼が王子だからってだけじゃないんだ。人々は彼が生まれた日のことも、初めて立ち上がった日のことも、怪我をして大泣きした日のことも、毎日見せてくれる笑顔も全部覚えていて、その子のことが好きでたまらないんだよ」

そこまで言って、ジェドは満足げに笑みを浮かべた。

「だからみんな本当は王子とは離れたくないんだ。だけど王子が旅に出る日が来たら、人々はそれも喜ばしいことだと思っている。なぜなら彼らの王子様がどこへ行こうと愛されるのを知っているし、もっと大勢の民に彼を知ってもらいたいと思っているからさ。人々には自信があるんだ…自分たちの王子がほかの誰より素晴らしいと」

目の前に広がる村の明かりがところどころ風の中で瞬いている。

日が暮れて、地上が暗くなればなるほど光のひとつひとつが際立っていく。

「まあこれはとある辺境の人々の話だけど。だからさ、アデル先生も同じようなもんで、ユアンに出て行って欲しいとかじゃなく、ユアンを誇りに思うからこそそう言ったんじゃないかな」

「うん……」

頷きながら、自分が家から出て行くことをほのめかされて不安になったのは、兄の気持ちを疑ったからではないことにユアンは気がついた。

ただ兄に可能性を示されて、初めて自身の道がどこまでも広がっていることを知って驚いたのだ。

たとえ死ぬまでこの村を出ないとしても、その道を確かめて歩いて行けるのは自分のほかにはいなかった。

そのことがわかって、ユアンはようやく家に帰りたいと思ったのだった。

「……そういえばお腹が空いたなあ」

ユアンは小声で告白した。

遅くなったことを兄に詫びなければいけない。

「私たちも一度戻るわ。今年は母がやたらはりきってるのよ。あとでどっさり料理を持っていくから覚悟していて」

「そういや今年のケーキはアデル先生が自分で焼くって言ってたな。間に合ってないかもしれないから、早く行って手伝った方がいいかも！」

三人は走り出した。

夜道ですれ違う人々が、口々に「あとで寄るよ」とか「気をつけて」などと声をかけてくる。

ユアンは彼らに手を振りながら、兄の待つ家へと急いだ。

◆

後片付けが終わって、双子がジュノー家を出たのはもう深夜のことだった。

最近は過激派の船があたりをうろついていることも多いから、二人は外出時には帯刀を欠かさない。

「アナのプレゼントは最高だったな！本当にユアンにあげちゃって良かったの？」

アナがユアンに渡したのは帝王杯常勝の若き剣士L．A．の切り抜き記事を集めたスクラップ帳だ。

村に入ってくる新聞は限られた数しかないから、それを集めるのには相当な労力とコネが必要だった。

その努力の甲斐あってか、ユアンは大喜びでそれを受け取った。

今までに見たことのない記事を見つけては歓声を上げ、誰にも頼まれていないのにそれらを読み上げ、まわりに聞かせたのだった。

「私もL．A．のファンだけど、あれは私には必要のないものよ」

そうか、とジェドは頷いた。

彼自身が渡したのは美しい細工の付いた隠しナイフだ。

ぱっと見はただのスカーフ留めだが、裏側の突起を強く押すと短い刃が飛び出してくる。

ユアンはそれをとても気に入って、やたら慎重な手つきで刃を出したり引っ込めたりした。

護身用にと思ったけれど、おそらく彼はそれを大切に自分の宝箱にしまい込むだろう。

ふとジェドが海岸のほうを見やると、遠くにかがり火がいくつか見えた。

夜の合間も村人が順に見張りに付いているのだ。

それほど最近の情勢は緊迫していた。

島の南のマーレ城からもしょっちゅう伝令がやってくる。

帝国中枢を蝕むようなにかがひっそりと起こっていて、たいていのものはそのことにまだ気がついていなかったが、マーレ島の人々がそれに敏感に反応するのはある意味当然のことだった。

彼らはもうすでに巻き込まれていたからだ。

とくにこの集落はそうだった。

なぜならその陰謀の渦の中心にいるのが、あのユアン・ジュノーその人だからだ。

そのことに気がついていないのはおそらく本人だけだろう。

「私、こんな日がくるんじゃないかといつも思っていたのよ。だから私に必要なのは、L.A.を賛美する気持ちではないわ。あの強さそのものが欲しいの」

実の兄相手にしても、これほどアナが気持ちを吐露するのは珍しかった。

アナほど緊張はしていないが、ジェドも気構えとしてはまったく同じだ。

「さっさと帰って寝ちゃおうな。明日の夜は俺たちが海岸線の見張りをする番だし」

十六才になった日に、双子は自ら自警隊の一員に加わった。

なんとしてもユアンを守りきりたいという気持ちが強かったからだ。

彼がこの島を出て行くその日までは——

「さっきの話には続きがあってさ」

二人の家もうそこだ。

玄関先の松明に照らされて、双子の父親が今夜の見回りの準備をしているのが見えた。

さっきまでユアンの前でワインを何杯もあおっていたのに、けろりとした顔で愛用の剣を振り回している。

「いつか王子が旅立つ日が来ることは、その幼なじみたちにも知らされていた。だけどその子たちは願っていたんだ。一日一日がなるべくゆっくりと過ぎますように…もしもこのまま時間が止まってくれたら、ずっといっしょにいられるのに…ってね」

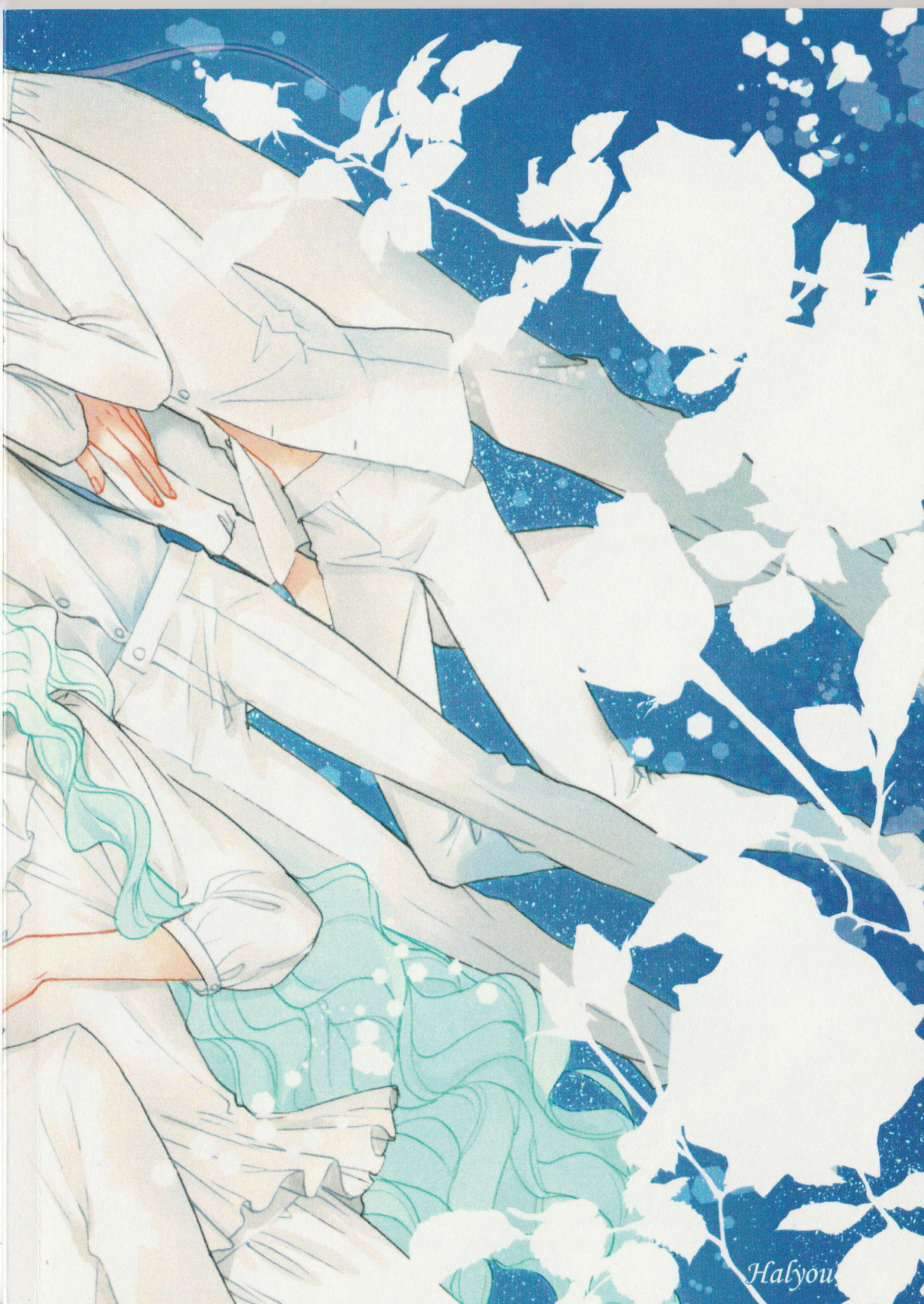
二人の親友が無邪気にL.A.と名付けた犬が走ってやってくる。

気がついた父親が、双子に向かって大きく手を上げた。

16th　終わり

千年迷宮の七王子 番外SS同人誌「BEFORE DAWN」 2016/10/23発行 ハル有（花鶏ハルノ＋相川有）

2020/6/20 第六版


Halyou